



高野山金剛峯寺・阿字観(瞑想)道場

# 岩屋山 観音たより

発行所：和歌山県  
海草郡下津町橋本一〇六五  
福勝寺内

電話 (073) 4941031  
編集人：本多碩峯

## 賀正

日本国家の太平と皆様の平安をお祈りします。

二十一世紀に生かそう佛教

修行僧・同行二人 本多碩峯

### 真理の花たば



行く水に身をば まかせて人のため  
いそしみめぐる水車かな

前第六番安楽寺長老・大僧正・勲五等瑞宝章  
故畠田禅峰書

皆さん各自に家族をはじめ身近な身のまわりの二十世紀は如何なものであったでしょうか。

聞き、目にする明治、大正、昭和そして今日の日本社会は如何でしょう。

どのご家庭でも、身近な社会でも、幸不幸の根元は一体何だったのだろうか。

一方視野を広く世界を眺めますと私たちが日本人は本当に幸せなんだ、我が家は本当に幸せなんだ、と美感するほど、世界には食糧難で食料飢餓に苦しみ死を待つしかない本当にかわいそつな子供達がいる貧しい国もある。又依然として旧体制といいますが専制体制の絶対主義圏で個の存在を抑圧する体制で個人主義とかそこに芽生える合理主義が存在しない、個人の自由が認められない抑圧された人々もいる。

私たち日本人は明治維新によってそれまでゴトゴトアとしていた個人主義の門戸が開けられ戦後、更なる欧米化が進んで今日に至った。欧米の合理主義や個人主義には空想の世界も実現する科学技術の進歩の驚異に目をみはるものがある。その成果による科学技術の行使によ

### 明日の装を提案します!

寝装・和装・洋装・総合繊維卸

株式会社 **マスメン**

代表取締役 増田都司夫

本社

〒640-8376 和歌山市新中通 2 丁目 8

TEL (073)424-4466(代表) FAX (073)436-6508

### 豊かなまちづくりに参加します!

株式会社 **田淵建築設計事務所**

無限供給の原理に基づく創造!!

代表取締役木田耕藏

本社

〒640-8287 和歌山市築港 4 丁目2-1

TEL(073)431-0261 FAX(073)431-3898



阿字観(瞑想)道場

等々による事犯が想像もしなかつた巨悪化、近代社会生活の中で人間感情の失われていく人間性喪失が新たな大きな課題を二十世紀から二十一世紀に大きな難題を受け継いだ事を私たちは自覚しなければならぬ。  
仏教信仰の原点 日本人には独特の霊魂観念という考えがあつて、それに基づく祖先崇拜がいろいろの意味で非常に重要な役割を果たしている。そういう霊魂信仰と祖先崇拜というものと、

科学技術の進歩に伴い、むしろ佛教を考え直す時が来たと考えるのであります。  
則ち佛教本来の教義である仏法を問い質す時であります。歴史的に日本の宗教はどのようにに民衆と拘わつて来たかを宗教学者・山折哲雄氏の言をかりますと三つに分けて考えられるそうです。  
第一に奈良時代：この時代の特徴は人間の霊魂が何かの折りに肉体から遊離してゆく、そういう遊離魂にたいして感覚が非常に敏感であつた点に求めることができ、遊離してゆく魂は当然空中を浮遊しながら、何かの拍子にふたたび人間に憑依(ひょうい)します。それを憑霊(ひょうりやう)という。魂が肉体から飛び出したり、また肉体に憑(ひょう)いたりする

そのような遊離魂を信仰の基層にあつたと思われるそうです。

第二に平安時代：先程の遊離魂信仰が一種の怨霊(おんりやう)信仰に発展し、人間や社会や自然に危害を与えるその怨霊(おんりやう)物の怪(け)と呼び、また祟(たたり)り霊であるところ、このうゆ信仰が急激に高まったのが平安時代だと言われています。

第三に鎌倉時代になりますと、そういう怨霊とか祟り霊を鎮魂する儀礼と並んで、人間が如何に成仏するかということがいつつ大きな問題となる。

源信(九四二―一〇一七)：天台宗の一人として浄土教を日本で体系的に組織つけたのが源信であつた。源信が強調しているのは、いつまでも念仏を唱へ浄土を觀想して極楽に往生すると説か

れ、どこまでも積極的に觀想し念仏を唱へるといつつこと、これは他力念仏でなくて自力念仏であります。

私たちは毎日のように念仏を唱へる生活をしていて、いざ死が迫つたとき、安心して往生できるだろうか。確信をもって浄土に生まれると

言ひ切れるだろうか。そういう疑問がだれでも当然出てきます。

この事が生身の人間にとって、地獄や極楽、ついて議論などよりは、この事が最も大切なことです。  
新義真言宗宗祖・覺鑊上人(一〇九五―一四三三)：覺鑊上人は宗祖である弘法大師を深く崇敬し、その思想の継承者として

つて、近代文明諸国は交通・情報・日常生活医療において飛躍的に豊かな社会を築き上げてきました。

日本国民の多くは経済的巨万富者からの脱却(だつてつ)を目標に国と共に歩いて来ましたが、我が日本は戦後の壊滅的な破壊から復興し今や世界の経済大国として欧米をはじめとして世界の諸国で経済的なリーダーシップを取ってきました。

果たして今日の日本は私たちの家庭が幸せを掌中にしたと言えるでしょうか。

否、青年の犯罪、両親による子供の虐待、宗教と言つて名の下の犯罪、政治家の理念に反する悪事、企業家のあるまじき行為、官僚の不正義な行為、企業の倒産

皆さんのスーパー  
**株式会社 みち屋**

代表取締役 **道畑 勇**

本 部 和歌山市岩橋 7 2 9 番地の 6  
TEL (073) 473-4197

松 島 店 和歌山市加納 2 4 6 番地の 1  
TEL (073) 474 - 3500

貴志川店 那賀郡貴志川町大字北山 5 1 7 番地  
TEL (0736) 64- 7020

大切な法事料理は  
経験豊富な**三都家**  
におまかせ下さい!

お昼は日替わり献立で  
皆様をお待ち  
しています!

〒640-8393  
和歌山県和歌山市畑屋敷端ノ丁24  
TEL(073)423-3355 FAX(073)



理解と敷衍(ふえん)に努力した。しかし時代は鎌倉時代という大変革を目前とした。まさに討ち入り前後という時である。高野山上ですら南無阿弥陀仏の唱名念仏が聞こえたという、まさに浄土教のブームである。

空海が去つてすでに二百八十年が過ぎ、空海の伝えた真言密教の本義さえ知る者が少なくなつていくとき、覚鑿は別所に籠もりひたすら念仏往生を願つて暮らす隠遁者をつらやましく思つた光景があつた。高野山内にも念仏行法が広まるにつれ、弘法大師空海の伝える真言密教の実在する本義に帰一すべき議論も高まる。覚鑿は朝夕霧深い谷間に聞こえる念仏の声に耳を傾け、一切の諸行をなげつゝ念仏行者に親しみを覚える。彼は釈迦の遺骨をどう扱つていく講式をつくり、ひいては民衆の間に骨を崇拜し、墓を設ける習慣をつえつけた。孟蘭盆(うらぼん)彼岸には仏が帰ってくるという供養の形式も、卒塔婆講式も覚鑿がととのえて人々に広めたといふ。このよつな経緯で平安時代後期、十一世紀の頃、高野山の密教教団組織が調子。

上層部は弘法大師の跡を継ぐ僧侶達が存在し、学問、行法を主体とした。

下層部はこれを支え、堂塔を守り法会の下働きをし、寺領の管理などを行つた行人方が形成した。

これには周辺の住民達が教団に加わつた外に出て、高野山への納骨をすすめる、高野山及び弘法大師の唱導洋活動をしたのが所謂「高野聖」で、これは聖方である。

高野山への納骨信仰は高野聖によつて都会といわず地方といわず全国的に高野山への納骨が盛んに行われるよつになつたといわれている。

このよつにして聖の手で、高野山は日本一

の納骨信仰の聖地となつた。

浄土宗宗祖・法然上人(一一三三-

一一二二)：人が死んだら「タマ」となつて山に帰る。これが古代日本人の靈魂観であり、いわば日本人の根つこの宗教である。この浄土教が独立の法門であることを明らかにしたのが法然上人である。

誰でも南無阿弥陀仏と唱えれば、彌陀の願によつて極楽に往生ができることとなつた。しかも、この教えは、釈尊がこれを説くためにこの世にお生まれになつた教えである。法然上人が説かれました。こうして浄土信仰は日本人の靈魂観根つこの宗教に相応し、浄土教は日本の大地にしっかりと足を踏まえるに至つた。

浄土真宗宗祖・親鸞上人(一一七三-

一二六二)：親鸞は九歳で比叡山に登り二十九歳で下山するまで堂僧といつて低い身分で厳しい修行された。師匠の法然の教えに悩み抜いた結果、師匠に対し絶対随順であつた。道元の師匠に対する姿勢と根本的に異なつた。

親鸞の傍に居て、日常の言葉を耳の底に刻みながら信を会得し、東国常陸に戻つては働く村の衆と共に念仏を行ひ、気になれば袋を背負い遠く和州の山にまで入つて法を説いた。唯円房六十九歳の生涯であつた。唯円が次のよつに語つてゐる。

「つみを滅せんとおもわんは自力のこころにて臨終正念といひの人の本意なれば、他力の信心なきにてそつろつたり念仏して罪を消すつなどと思つて念仏もつす人は、念仏を自分の都合のよいよつに利用する人であり、いのちが終わる時に、仏さまや、ボサツ方の迎えを願つといひ、臨終に救ひの完成をみる人々の本意であつて、私たちのよつに、今こゝでアミタ仏の真実によつて

人生を生き生きと生きるという「信心」のない人々です。」

死の間際に、諸々の仏さま、ボサツ方のお迎えをいただいて仏の国に生まれるといふ信仰の拒否でした。臨終に救ひが決まるのではなく、もつといへば、臨終のありよつによつてその人の救ひが決定するのではなく、救ひは、今アミタ仏の真実に信順して生きる時に決定する、といふのが親鸞の教えです。親鸞が往生(生前八十八歳一二六〇)の手紙に次のよつに記されているそつです。

「親鸞善信(が身には臨終の善惡をば申さず、信心決定(けつじょう)のひとは疑いなければ正定聚)しようじょうじゆ(に住することにてそつろつたり。さればおわりもめでたくそつろつたり親鸞にあつては、臨終の善し悪しなど全く問題になりません。なぜならアミタ仏の真実に生きてゐる人は、救ひに対して全く不安もなくこの人生をめいっばい生きてゐる人であり、かならず仏になることが決定しているからです。したがつて、このよつな最後であつてもそれはめでたいものなのです。」

人間の最後は死ですが、親鸞は念仏者、死を往生(新たないのちの始まり)とし、それはよりよき生(念仏の人生)がもたらした「めでたき」ものとしたのです。

罪を消す必要もなく、臨終のありよつも一切にすることのない、今今日一日、良心ある(善く悪を判別する心)確かな生、あたたかな死といひのちの充実があります。

曹洞宗の宗祖・道元(一一〇〇-

一一五三)：道元は十三歳のとき比叡山に登りましたが、わずか一年と数ヶ月で、つまり十五歳のとき下山しております。十五歳で立宗開教の時点に立つていたのでなく、また只

坐(しかんた)の道元世界にもちろんとどつていない。いつたい、なぜ十五歳で山を下りたのか検証はされていない。

伝記では両親に死なれて無常感にさそれて出家されたと書かれています。道元は九歳にして、但念良論といふ書物をくり返し読んだといわれ、道元は佛教的な知識、インドに発生した佛敎の世界観とか人生観とか社会観とかいふものを貪欲に学ぼうとした人です。知的探求心といふ好奇心がまずあつて、そつろつ内的な衝動に促されて、比叡山に登つたのではない。ただ、道元の知的な好奇心といふものも大変なものであつた。たつたといひられています。

最澄以来、常日頃、修行の中で、人間は本来仏性が具わつており救われてゐるんだといふ真理に対し、道元も本来仏性をすでに持つてゐるのに、なぜ、毎日修行に励まなければならぬか、といふ疑問を持つても当然のことでしょう。

親鸞の師は法然一人でありましたが、道元は宋西であつたり、明全であり、最終的には中国に渡つて如浄(にょじょう)についた。全部で三人の師についた。

如浄には随順でありましたが、師宋西にはある面では畏敬しているが、求道精神の中に「殺仏殺祖」がみなぎつていたそつです。

『正法眼蔵』の生死の巻で、道元禪師は生死を業に重く示されています。

「本文」

生より死にうつるといふことは、これあやまりなり。生はひとときのくらゐにて、すでにさきありのちあり、かゝるがゆゑに仏法のなかには、生すなはち不生といふ。滅もひとときのくらゐにて、またさきあり、のちあり、かゝるがゆゑに仏法のなかには、生すなはち不生

といふ。滅もひとときのくらゐにたまたさきあり、のちあり、これより滅すなはち不滅といふ。生といふときは、生よりほかにものなく、滅といふときは、滅のほかにもなし。かるがゆゑに生きたならば、ただこれ生、滅きたらばこれ滅にむかつてつかふべしといふことなかれ、ねがふことなかれ。

訳文

生から死に移ると考えるのは誤っている。生とは一時の状況であり、これは過去の結果であり、未来の種子でもある。それゆゑに自覚の世界では生はそのまゝ今生と呼び、未来の種子が芽生えている。このことから滅もそのまま不滅といふのである。つまり生といふときには生以外の何者も存在しないし、滅といふときには滅以外の何者もありません。生が訪れたときは生ばかりであり、滅が訪れたら滅ばかりであるが、しかしそこでじはたしてうまく立ち回すつてはならないし、何かのアテを、描いてもならないのだ。

私は出家するまでにそして四国第六番安楽寺に出家後も自室で手にした書物は『正法眼蔵を讀む』(谷口清超著)であった。

本文

さらし、「行持の巻き下・感謝報恩」にいまの見仏聞法は、仏祖面々の行持よりきたれる慈恵なり、仏祖もし単伝せずば、いかにしてか今日にいたらん。一句の恩なお報謝すべし、いはんや正法眼蔵無上大法の大恩、これを報謝せざらんや。

訳文

いま吾々が仏に会い、真実の教えを聞くことが出来るのは、仏祖の方々の行持の大恩によるのである。もし仏祖が 次々に教えを伝えて下さらなかつたら、 どうして今日まで真理が単伝されたであらうか。一句でも、一部分でも、真理の言葉を伝えられたという御恩に感謝しなければならぬ。ましていわんや、正法眼蔵無上の大法を伝えられた 大恩は、どうして感謝せずにおられようか。

自覚の生命に生きた祖師方が、その生活のリズムを確実に一人の弟子に伝えられたら、どうして今日に伝えられたらうか。わずかな言葉が人を変え、些細なあり方が人を動かすことを感謝実行せねばならない。まして真実の人生のあり方が私たちを揺り動かす、この事実を感謝して継承しなくてはならない。当時の親鸞と道元の弟子に対する違いは親鸞は在家主義、道元は出家主義ということであろう。

二人の違いに優劣を考へるのでなく、人の指導の仕方に二つのパターンがあるということだと思ひます。

今は亡き田中忠雄先生の何度かお話を拝聴し、先生の師沢木興道老師の生き様を知り、又当県出身山本玄峰老師の生き様を学び、これぞ本仏性・本不生新たに感動しました。

日蓮宗宗祖・日蓮上人(一一二二—一二二八)：日蓮は二十一歳のとき比叡山に登つて三十二歳まで約十年間修行されていきます。

安房国(千葉県)小湊もつまれた日蓮上人

は幼名を善口麿(ぜんいちまる)といつた。十一歳のとき真理を探つて清澄山の道善阿闍梨に入室し、ついに嘉永二年、十六歳で受戒得度して是生坊連長と号した。

たまたま無量義經を讀み、これまでの諸経は方便で説かれたものに過ぎないことに感じ、真実の仏法を求めて鎌倉に赴いた。光明寺の大阿上人に浄土教を聴いたり、禅の宗義を究めたのはこのころである。

仁治三年、二十一歳 大阿上人が遷化されたので比叡山に登り、天台を学んだが、最澄傳教大師の教えを究めて、法華經にのみ佛徳の大海があることを悟つた。そこでさらに研鑽をかね、建長五年、三十二歳故郷に於いて、「念仏無問(ねんぶつむけん)、禪天魔、真言十国、律国賊」の有名な四箇格言を明らかにし、法華題目を唱えて立宗を宣言した。名前も日蓮と改め「われ日本の柱とならん、われ日本の眼目とならん」の誓いをたてた上人は、たたちに鎌倉松葉ヶ谷に庵室を構え、日昭を弟子として、小町大路での辻説法をはじめた。

天変地災や疫病の流行にいよいよ宣教の必要を痛感した上人は、文応元年、三十九歳、立正安国論を著して最明寺時頼に献上し、国練(こくかん)を行つた。しかし松葉ヶ谷の庵室が焼打にあつたのをはじめ、上人に対する迫害は次第に激しくなつた。

弘長元年、四十歳 伊豆へ流罪、四十三歳のとき小湊に重病の母を見舞つたあとの東條景信による小松原の法難、そして文永八年、五十二歳の龍ノ口の法難でクワイマックスに達した。龍ノ口で斬首されるところを奇跡的に助命された上人は佐渡へ流された。他宗との法論や『開目抄』『観心本尊抄』の撰述に苦難の生活が続けているうちに、世情は険しくなつていった。




LEC Life of Electric Communication

株式会社 **ミヤタケ**

代表取締役 **宮下隆博**

〒640-8329  
和歌山市田中町4-119  
TEL(073)422-2327 FAX(073)436-5598



JAPAN MEDITECS

人に優しい音声発生装置!

株式会社 **日本メディテックス**

代表取締役 **山口昭昌**

〒641-0054  
和歌山市塩屋5丁目5番43号  
TEL(073)446-2009 FAX(073)446-3696

文永十一年、五十二歳、二月、赦免された上人は身延に隠れ、極度の貧窮のうちに法を説いた。この年、十月には、第一回の蒙古襲来があった。

再度の元寇(げんこう)の翌年、六十歳春頃より上人の健康は衰えをみせはじめた。弘安五年、六十一歳、静養の目的で身延を発つて関東に向かい、池上の宗仲宅に止まった。そして九月二十三日、ついに上人は池上にて遷化された。遺骸(なきがら)は身延に葬られ、日蓮宗徒の慕情をあつめつつ、祖山に護持されている。(大法輪、昭和二十二年十一月号より)

大映映画『日蓮と蒙古大襲来』に日蓮上人に扮した俳優長谷川一夫氏が次のように語っている。

この十年間、日蓮宗の信徒として身延山にお参りして来たこの私が、こどもあつたに宗祖日蓮上人に扮するとは思ひもよらぬことでした。正直この映画出演が決まった時、私は恐ろしさが先に立つて手も足も出ない思いだったのです。

私は四十年に及ぶ俳優生活で、これほどの難役は他にありませんでしたし、おそろしくこれからもあつたとは思えません。

ある時は武将のように雄々しく逞しく、ある時は女性的なまでに優しく、ある時は神心のような気高さと威厳とをもった偉大な人物を表現するといふことは、私にとって至難の技と言わねばなりません。

.....

十五歳の折から比叡山をはじめ高野山、奈良、京都十七年間わたって修行をつみ一切経はもとより和漢のあらゆる学問をおさめて、和歌まで研究された日蓮上人は、

ある意味では現在の最高学府大学を卒業された人々よりもインテリであったと思われる。その日蓮上人が法衣をまくり上げ、かなぐりすてて道を説いたのですから、既成勢力が日蓮上人を弾圧したのも当然と言えましよう。

そうした意味でキリストとも似た点を発見できますが、キリストから受ける弱々しさ、痛々しさといった印象はなく、もつと猛々しい誰にも負けないといった感じが日蓮上人だと考えます。ただ前にも云いましたように、それと同時に日蓮上人のもつた優しさ、気高さ.....といった多面性をどこまで表現できるか、私にとってこれは大きな宿題として残されたものなのです。

.....日蓮上人が迫害と闘いながら大衆と手を取りあい、大衆の中にとけこんで法を説きつづけた姿を、私は映画という私の世界でやって見たいと考えているのです。その生涯を一筋に仏道をきわめ、その信念、行動にいささかの過失もなかった。

偉大な聖人には遠く及ぶべくもないのもたよりですので、私はせめて大衆と手を結ぶ点だけでも日蓮上人のそれに習いたい、私の演技態度のポイントをそこにおいたわけなのです。

ともかく確固不動の信念のもとにわが道を行つた日蓮上人は、二十二年間の勉強で時の執権に法を説きましたが、その約二倍の年月を芸の道に歩んできた私が、いまだに道を悟れない情けない状態です。いかに大変なことであるか、つくづくと感じ取っているこの頃です。

南無妙法蓮華經 (大法輪昭和三十三年十一月号より)



当山福勝寺重要文化財梵鐘楼

## 私の夢

### 二十一世紀の密教

「過去を深く知ることは、未来をより正しく見詰め得る」と学んでおりますが、二十世紀は日清日露そして第一次大戦といつ不幸な出来事の中にも我が国は西欧化の中で、合理主義と個人主義を勝ち取る時代だったと言えるところです。その為に日本文化の喪失といつ犠牲を伴っていることも事実です。

すなわち、合理主義や個人主義を勝ち取るために社会の包括的秩序も一緒につぶしてしまつた結果の現象だと思つのであります。個人の自由と人権といふことを確立しようとする動きの中で、個が個性として輝き、意味を持つてくるのは、実は全体的な包括的秩序があるからなのです。従つて今日の日本の社会はその形式をつぶしてしまつていゝのではな

いでしょか。その結果、今日の個は利己的な個といふ姿

で現代に現れているのではないか。つまり、本来私たちが求めていた理想的な全と個の調和した個人主義とは異なつた形式の現れと思つのであります。

私は真言密教を学び実践する末席の僧であります。日常の勤行と実践生活で高野山での勉学を通して二十一世紀がどうあるべきかを考えたい。

密教は釈迦佛無しに存在しない事を先ず自覚しなければならぬ。更に中国で育たなかつた密教が我が国で脈々と育んでいる分けは弘法大師空海が真言密教を展開したからに他ならない。

真言密教は宇宙のスケールを持つ法身大日如来を本尊としております。

しかもこの大日如来は真理としての人格にとどまらず、全心身を挙げて説法したもう活躍している人格体です。それゆえに、一木一草一瓦礫に至るまで、それぞれが目的存在であり私も一人一人も大日如来といつ一つの命によつて根柢から生かされているといふ事実を真に自覚する事が、二十一世紀の抱える諸問題解決の基礎となると考えるものであります。即ち大宇宙をそのまま仏様として拝む密教といつことが出来ませぬ。

夜空にきらめく無数の星

天体から

始まつて地上に棲息する山河草木禽獣虫魚等勿論人間も含めて、在りとしあらゆる生きとし生ける一切の森羅万象

友情非情です。此れらのすべてを内に包んでいる大宇宙はそれ自ら唯一の生きものであり、いいかえれば限りない大きな身体をもち三世生き通しのいのちをもつて働いている大霊です。その唯一絶対の大霊の身体が千変万化に姿形をかえて現れて、山となり河となり木となり草となり、人とな





り、無数の星天体となつて大宇宙が形成されているのです。

このような宇宙をそのまま仏様として拝むのが、とりもなおさず密教なのです。

それ故に弘法大師の代表的な言葉でいいますと相互に依存している関係だと。この世界の一切の存在者が互いに主となり従となる、互いに人間と他の生きとし生けるものとの間は主従を交換し合うような、そのような相互依存関係によつて共生していると見ます。西欧に於いても現在の合理主義、自由と人権を元とする個人主義がユートピアであったはずが大自然との相互依存の関係の形式の枠組みが失われていることが、

**第一、環境の問題。**

**第二、生死、医療の問題、**に取組み生命倫理観の確立。

**第三、人間性喪失から如何に豊かな人間性**

を回復するかの問題。

**第四、グローバル化に伴い民族言語の異なり他国間、異宗教など多様な価値観による相互理解と共存原理の確立。**

以上の必要性が他に数ある問題の中でも急務とするところであります。

**重要文化財、当山福勝寺本堂で瞑想に耽る僧・本多碩峯**

第一の環境問題の根元は現在経済学は「生活水準」を測る場合、多くの消費を尺度とするが、**佛教経済学**ではこの方法は大変不合理であると考ええる。

そのわけは、消費は人間が幸福を得る一手段に過ぎず、理想は最小限の消費で最大の幸福を得ることであるからである。そのわけは、消費は人間が幸福を得る一手段に過ぎず、理想は最小限の消費で最大の幸福を得ることであるからである。

**第一**この問題は人間として最も重く尊い生命倫理観でしかも鎌倉時代以来十世紀にわたつて靈魂崇拜の倫理観を養つてきました。二十一世紀で最も重要な課題であります。二十世紀は社会の仕組み、即ち西欧化の中で日本文化の喪失が過大でありましたが、二十世紀は石器以来の道具の発見、コンピュータ、文字の発明以来の情報発明、インターネットの出現により正に生命倫理観が問われているのであります。

この時、空海密教が語っているのであります。私たちが親さまから頂いた命を無駄にしてはならない、「生かすいのち」の真言密教のモットーを新たに考えたい。

英国の詩にあるそうですが、紹介します。

人は旅をする  
人は旅をして  
ついに家に帰る

人は生きる  
人は生きて  
ついに土に帰る

第二この問題は実は身近なところに潜んでいるのです。戦後の合理主義・個人主義の成立特に女性にとつて念願のユートピアは二十世紀にあつたが果たして現代がユートピアの社会といえるでしょうか。家庭や社会として女性の幸せのキーは美は家庭内にある。

この際、空海の密教思想、全体の調和と個人の個性を尊ぶ考えに帰し、女性の家庭内のワークが如何に尊く素晴らしいかを国家的政策として、奥様給料を年金や各種手当の前に報酬を払つことと人間性の喪失を回復し女性の幸せ、協力し合う人間性にあふれる社会が生まれる。

人として社会的なハンディキャップの人々を国民全体(国家)で支える時代が二十世紀だと思ひます。

再び青年男女に結婚を夢見る時代の到来を期待するものであります。

また、今日の最先端の技術が京都から発信されている状況は、心豊かな文化を継承している京都人、伝統文化の継承に努力された人々に敬意を表すと共に、過去の明治維新や戦後の民主化への取組で無くした日本文化を検証し、良きことを継承する人心を育もう。

**第四**、「神は多くの名前をもつ」(ジョン・ヒック著・岩波書店)現代社会における宗教の多元化現象のただなかで、キリスト教はユダヤ教、イスラム教、シク教、ヒンドウ教、仏教など他の世界宗教をどう認識しようとし

ているのか?というマンダラ思想の考えが芽生え始めました。真理は一つ、「万教帰一」から空海密教の『大宇宙の生きとし生けるものは、すべてみなこれ父であり母である。』弘法大師書、大日開題への回帰であります。

『私たちの心はむしろ肉体の外にあり、天地一杯の所に本来在つて、それが肉体を生み出してそれを包みその機能を通じて出てくるにすぎない。その場合この肉体を通じてくるのを仮に「我れ」と名付け、彼の肉体を通じて来るのを仮に「彼れ」といつに過ぎない。強いて云えば大地一杯の心、大宇宙の生命が無数の個体を生み、その個々の機能を通じて自ら開き示す燃焼が、意識活動となる。』

たまたまその一つがこの我であり、他の十百が彼となるのです。随つてお互いの肉体の中に別々に自我があるという自我思想は誤りであるといふ言葉を発見と密教思想、阿字観行で体得し、二十一世紀の楽しい旅に出發する。

**編集後記**

尊敬する宮井卓兄より久々の朗報がメールで届く。約二十年前に大手役員を引退されましたが、さか上ること十五年前開発部長時代のグループメンバーが三十人程集い傘寿を祝つて頂いたそうです。祝つた三十人のメンバーのご家族にそして宮井卓兄のご家族に素晴らしいプレゼントだった。

今日、倒産、リストラの多い企業社会に心温まり、人情篤い話題が最高、何とも温かい笑顔の宮井さん、その笑顔を絶やさないでほしい。他人を癒してくれる素晴らしい笑顔。

以前、軽薄短小ブームがありました。その原点といわれる書物、「スモール・イズ・ビューティフル」(シューマッハ著・講談社)は、今日、世界が西欧化しつつある以上、人間の、という一般化は許されるだろう。現代人は自分を自然の一部と見なせず、自然を支配、征服する任務を帯びた、自然の外の軍勢だと思つている。現代人は自然との戦いに勝つてはうばかけたことを口にするが、その戦いに勝つては自然の一部である人間がじつは敗れることを忘れていふ。人と人間中心の経済学は自然との調和、と語りかける。